

それぞれの愛 一ノ瀬 綾



それぞれの愛

一ノ瀬  
綾



一ノ瀬 綾 (いちのせ あや)

1932年、長野県に生れる。1969年、小説  
「春の終り」で第12回 農民文学賞受賞。

1976年、「黄の花」で第16回 田村俊子賞  
受賞。新日本文学会会員。主な著書に『黄  
の花』『遠い朝』『独り暮らし』がある。

それぞれの愛

一九八四年五月二十五日 初版第一刷発行

著 者／一ノ瀬 綾

発行者／布川角左衛門

発行所／株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八

電話東京二九一―七六五一(営業)

二九四―六七一一(編集)

振替東京六―四一二三

郵便番号一〇―一九一

印刷／多田印刷 製本／積信堂

Printed in Japan ©一ノ瀬綾 1984 0093-80242-4604

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが小社読者係宛に御  
送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

それぞれの愛



その日、植生紀子は準夜勤だった。準夜勤は午後四時から十二時まで、深夜勤は十二時から八時まで、それ以降が日勤になる。病院には十五分前に入るようになっていた。

申し送りがすんで、医師や看護婦たちが帰った後は、またひとしきり忙しい。五時には夕食や与薬の介助、その記録や後始末、ナースコールの応待と、仕事は切れ間もなく続いていた。六時から検温の時間である。患者にはすでに体温計が配られていた。

インターホンで予告してから、頃合を見て病室を廻るのだった。紀子は、夜勤の相手である坂口真弓に声をかけた。

「検温の時、三十二号室の山崎さん、気をつけてね。食事の後、熱っぽいと言うから計ったんだけど、平熱よ。本人は熱があるって言い張るの……軽く扱われるかと不安なのよ。少し話し相手してやって」

「あの奥さん、嫌いだァ。前の入院先の看護婦のこと、すごく悪く言うでしょう。その口の下で、あなたはとても優しい、なんてネコナデ声出されると、ゾッとするわ」

「わたしも、嫌いよ」

「ああいう患者って、病院と美容院の区別がつかないんじゃない？」

「でもね、坂口さん……」

紀子は不意に、谷村婦長の声色になり、

「そういう患者さんに信頼されるケアをすることが、看護なのよ。相手の身になって、なにをのぞんでいるかを知るのが基本です。さア、もう一度行ってらっしゃい」

「ワア、顔までそっくり、気味悪い」

坂口真弓はのけぞって笑う。白い喉頸と盛り上った胸許に、二十三歳が匂っていた。直情的だが正直で明るい。仕事の方は看護歴二年目だから、まだ怖さが判らず、技術をマスターするのに夢中の時期である。今年二十九で、キャリア八年の紀子から見れば、坂口真弓はおろしたての白衣のよう眩しい。反面、患者にふりまわされる未熟さには、時折ハラハラさせられる。

職場における患者の陰口は、看護婦のタブーだが、むきになって目くじらを立てるのも大人げなく思えた。婦長でも主任でもない紀子に、坂口真弓は仲間意識で気を許してのことだろう。それとなくたしなめたつもりだった。

「お互い、クレームにならないように、気をつけましょうよ」

「そうね……わたし、すぐ顔に出るから」

真顔で応じてから、坂口真弓は手にしたビジュアルバインダーの患者記録を渡してよこした。検温時の要注意患者の確認である。外泊一、与薬拒否一、患者同士のトラブル二件、重症一……。受持ちベッド数五十三床。ここは内科病棟である。

青葉台病院は、総ベッド数百二十床の個人病院だった。内科、外科、胃腸科のほかに、去年から

透析センターを増設していた。医師九人、看護婦四十八人が医療スタッフである。地上五階、地下一階のビルの中で、埴生紀子の勤める内科病棟は三階にあった。二階の外科病棟と、四階の透析センターにも、それぞれナースセンターがあり、担当の看護婦が勤務していた。

各病棟が三交替制の二人夜勤になったのは一年ほど前からである。三年前、紀子がこの病院に入った頃には、二人勤務で二十四時間の当直制だった。重症者が居る上に急患でもあったりすれば、それこそ看護婦の方が倒れかねない。医療ミスにつながる不安でストレスがつのり、若手の看護婦が居つかなかった。

紀子も幾度か辞めることを考えたが、どこの病院にもそれぞれの問題があることを思つて辛抱した。病院が二人夜勤に踏切つたのは透析センターの増設がきっかけだった。二人制になつても、受持ベッド数が増え、看護管理は複雑になる一方だから、仕事が楽になつたわけではない。毎日がさし迫つた対応に追われて過ぎていく。それでも相棒がいる夜勤は気が楽であった。

六時十分前、紀子は坂口真弓をうながして、ナースセンターを出た。エレベーターを中心に、左右に延びた廊下にそつて病室が並んでいた。四人収容の大部屋が十二室、差額ベッドの個室が六室あった。現在満床である。二人は手分けして廻ることにした。紀子はまず、重症患者のいる個室へ足を向ける。

五号室の鈴木光夫、三十六歳。彼は四日前、救急車で運ばれて来た。ビルの建築現場の事故による怪我で、肩の骨折と胸部打撲による血気胸だった。外科と内科にわたる緊急手術で一命はとりとめたが、目を離せない重体が続いている。峠を越えて意識は戻ったが、まだ口をきくことも出来ない状態である。医師と看護婦によるカンファレンスが重ねられ、今は術後の肺炎併発を防ぐケアに



重点がおかれていた。外科の回復室から移されて二日目になる。

殖生紀子は静かに五号室の扉を押した。枕許に付き添っていた妻が、椅子から腰を浮かせて会釈する。彼女はやさしく声をかけた。

「いかがですか？」

「眠ってるんでしょうか……口をきいてくれないので心細くて」

青白くそけた頬をゆがめて声をひそめる。三十前後だろうか。病院へ駆けつけた時より、三つ四つふけて見えた。心痛と疲労にやつれる家族の姿は、見慣れていても胸を衝かれる。事故の場合はひとしおだった。

「大丈夫ですよ。ご主人は今、けんめいに闘っているんです。眠っているのは安定しているからよ……少しお休みになった方がいいでしょう。奥さんが参っちゃいますよ」

明るく気さくに言いながら、紀子は素早い視線を患者に注ぐ。現在彼には二時間ごとのチェックが決められていた。前回は坂口真弓が見廻りをした。眠っているようでも本人は醒めていて、まわりの話を耳にとめてることがあるから、うかつな口はきけない。

紀子は患者の上に身を寄せて、顔色や息遣いを確かめる。呼吸数二十六、血圧百二十二の七十八、脈拍八十七。前回とはほぼ同じである。静かに掛毛布をめくって、患者の右腋窩に体温計を差し込んだ。肩と胸を包むサラシの白さが眼に染みる。

引き締まった上腕の筋肉に、働き盛りの男の活力がうかがえた。患者記録によれば建築士だという。見廻りで事故に遭ったのは不運だった。鈴木光夫はなかなかハンサムで、意志的な眉と均整のとれた目鼻立ちが、看護婦たちの話題になっていた。今はその恰好のいい鼻にも、酸素吸入のカテ

ーテルが差し込まれ、左腕には終日点滴の針が刺さっていた。ベッドの脇には持続吸引装置があり、胸腔内の分泌物が手術創につながれた管から容器にしたたがっている。体温三十八度五分、脈拍呼吸ともまだ不安定だが、さし迫った問題はないと紀子は判断した。器具類の点検をしながら、

「今落着いてますから大丈夫。少し休まれた方がいいですよ」

言い置いて病室を出ると、妻が後を追って来て彼女を引きとめた。

「本当のことを教えてください……主人は助かるんでしょうか？ 意識があるのに、手を握っても反応がにぶいんです。頭を打ってるんじゃないですか？ 心配で……」

「先生から説明があったでしょう？ 信じなければいけません。事故の状況では頭を打ってないし、検査でも異常はなかったの。反応がにぶいのは、まだその気力が恢復してないからですよ……。明日はもう少しよくなるでしょう。こちらで万全を尽くしますから、気を大きく持って、ご主人といっしょに頑張ってください」

付添いを励ますのも看護のうちだった。重症者の肉親はみんな、ワラにもすがりたい思いで問いかけてくる。医師や看護婦の答えが食いちがったら、相手に不安と不信の念を抱かせてしまう。おさなりの態度はとれなかった。次の仕事に心せかれながら、紀子はつとめてやさしく、

「あとでまた寄りますから」

「すみません、どの看護婦さんもみなさん忙しそうで……埴生さんは、わたしと同じお年頃なのでつい甘えて……」

気が楽になりました、と言いながら彼女は病室へ戻って行った。鈴木光夫の付添いは、日中だけ彼の母親という初老の女が来ていたが、あとは妻が一人で頑張っていた。事故当初駆けつけた縁者

や会社の関係者も、面会謝絶中とあつてか姿を見せず、小学校一年生だという一人息子さえあまり連れて来なかった。一家の主に突然倒れられた妻の不安と混乱は想像つくが、夫も子供も持たない紀子には、身につまされる思いは湧いてこない。口先だけの慰めなど言っている暇はなかった。

彼女は足早に、次の病室へ廻って行く。

「はい、検温ですよ」

一人ごと顔色を確かめ、熱を計り、脈をとる。患者によっては体位を変えてやり、褥瘡の誘発を防がなければならない。話しかけ、訴えを聞きながら次のケアを考える。それとない気配りで、患者が捨てたり枕の下へ押しこんだりした薬を見つけるのも、仕事のうちだった。

「アラアラ、こんなことして。いけませんね。お薬飲まなきゃ治りませんよ。せっかくこんなによくなったのに……どうしたの？」

なだめすかし、時には声を強めながら、飲まない理由を訊きたです。与薬拒否は治療に対する不信や不満がらみが多いが、中には看護婦に世話を焼かせたい甘えのこともあった。患者によっては、勝手にしろと怒鳴りたくなるが、忍の一字で笑顔をつくる。

「看護婦さん、お風呂はまだ駄目かな」

「先生のお許しが出ないとね……。あとで清拭してあげるわ」

「少し脚が痛むんだ。シップ薬くれない？」

「シップ？ 自分で勝手に決めても駄目。先生に診ていただいて、指示が出たら手当てしてあげますよ」

「そんな大げさな。看護婦さんの裁量でいいんだよ、ほんの一回分……ね」

「駄目です」

「融通がきかないね、あんたは」

身勝手な患者にはきっぱりした態度が必要だ。他の看護婦はすぐれるのに……。聞こえよがしの文句は無視することにしてた。我儘、横着、狡猾、陰険……。患者たちは、肉体の病の上にさまざまな人間性をむき出しにして看護婦にぶつけてくる。感謝と同じくらい憎まれる覚悟でいなければ、筋の通った看護はできない。これは紀子が八年間で身につけた実感だった。患者は多数、こちらは一人である。自分に出来る限界の見定めがつかないと、足をすくわれ、自信喪失で落ち込んでしまう。幾度そういう波をくぐったことだろう。つらい思いは多いが、それでも紀子は、機械相手の検査や手術室勤務より、患者とことばを交わせる病棟勤務の方が好きだった。

二人がかりの検温が終る頃は、いつも六時半を過ぎている。廊下や面会室にはまだ見舞客の姿があつて、消灯前の病棟はけだるい静けさの中に、おだやかなざわめきを籠らせていた。

ナースセンターに戻ってみると、受付の窓口に女が一人佇んでいた。コットのパンツルックが似合う、小柄でスリムな体つきをしている。ストレートな髪を無造作なお下げにして、化粧気のない素顔が印象的だった。

「なにか、ご用ですか」

紀子が問いかけると、部屋から坂口真弓が出て来た。

「その方ね、鈴木光夫さんに面会ですって」

「面会謝絶、ごぞんじないの？」

「そう言ったんだけどね……」

扱いかねた面持ちで坂口真弓が苦笑した。女は軽く頭を下げて、

「入口で様子を見るだけでもいいんですけど……駄目でしょうか」

「お身内の方ですか」

「いいえ……友人ですけど。今日、出張先から帰って、事故を知りました。おそいけれど寄ってみたんです」

友人は怪しい、と紀子は思ったが、相手の一途な話しぶりに好感が持てた。かといって面会謝絶の立て前を勝手に崩すわけにはいかない。

「会社の方もご遠慮されてますよ。先生の許可がないと無理ですね」

「入口から覗くのもいけません？」

「それほどに逢われたければ、奥さんと話してみたら……。身内としてなら見ないことにしますけど……」

女は一瞬、息を引いた。呟くように、

「……奥さん、付き添ってるんですか」

「当然です、重症ですからね」

女は眼を伏せて黙りこんだ。完全看護で付添いが居ないところでも思ったのだろうか。妻と顔を合わせられない間柄かもしれない。紀子は相手の出方を待った。女が顔を上げた。

「彼、いえ、鈴木さん、そんなに悪いんですか？ 胸を打っただけと聞いたんですけど」

「今が一番大事な時です。お見舞なら二、三日後になさったら……それとも、奥さんに逢われますか？」

「いえ、帰ります。すみませんでした」

軽い一礼を残して、女は窓口を離れて行った。二十四、五だろうか……。後姿に目をやりながら、紀子は女の素性に興味を持った。鈴木光夫が勤める会社のOLか、それとも自由業か。出張と言ったからには水商売とは思えない。恋人だろうか。看病にやつれた妻の顔が目に見えた。部屋に戻ると、

「ねえねえ、今の女、なんだと思う？」

机の向うから坂口真弓が身を乗り出す。好奇心に目を光らせていた。

「さあ、なんだろうね……」

相手になつたらきりが無い。紀子は軽くあしらつて、検温結果の記録にかかる。病院勤めをしていれば、人間の愛憎ドラマにぶつかるとはしょっちゅうだ。生死を問われる男や女、子供や老人、みんなそれぞれ自分だけのドラマを演じて去って行く。愛欲、物欲のかけひきに人の心の地獄も見れば、至純の精神に衿を正す時もある。心結ばれた者との否やのない別れを見る時が、一番辛い。

紀子の胸に、五年前の傷みが甦る。塚本吾郎が死んだのは、北アルプスの麓の町にある病院だった。——春山を甘く見た軽装備の若者、二人遭難……。テレビが報じた日の夕方、一人が自力で山を降り、塚本吾郎は救出後息を引き取った。紀子は、秋に彼と拳式の予定だった。遭難の一報を彼女に知らせたのは塚本吾郎の兄だった。

「ぼくはこれからすぐ現地へ行きますが、都合ついたら後から来て下さい。救出されても多分重傷でしょうから、紀子さんに看てもらえたら、吾郎も喜ぶでしょう」

当時、紀子は都内の大学病院に勤めていた。駈けつけた時、塚本吾郎はすでに霊安室に移されて

いた。雪溪に転落したという時に打ったのか、死に顔の右頬に痣<sup>あざ</sup>が出来ていた。こめかみから頬骨にかけて、蝶<sup>ちょう</sup>が羽を広げた型のその痣は、青白い肌に臍<sup>へそ</sup>脂色のインクをこぼしたようであった。拭ってやりたくて、思わず手を延べていた。病院の看護婦からきちんと死後処置を受けた遺体を何度もしさすりながら、紀子は自分の手で最後の処置をしてやりたかったと思った。

塚本吾郎は平凡なサラリーマンだった。私立大学を出るとすぐ金融会社に勤め、給料の大半を好きなレコード集めと山登りに費やすような生活をしていた。

彼が急性肝炎で入院した時、紀子が受持ちになった。

「患者と看護婦の恋なんて、医者と看護婦の仲と同じさ、離れてしまえば終りよ」

と同僚や先輩に忠告されたが、のめりこんだのは紀子の方だった。

意地でも結婚してみせようと思った。幸に彼は真面目で、退院の時には郷里から呼んだ両親に紀子を引き逢わせてもくれた。塚本吾郎は二十六、彼女は二十四になっていた。

仕事を選ぶか、結婚を取るかといったつきつめた思いが湧かなかったのは若さのせいだったのか。資格があればいつでも仕事に戻る、子供が出来るまでは働こうと、気楽に割り切っていた。紀子が真剣に自分の職業と向き合ったのは、塚本吾郎を失ってからであった。今でも彼女の胸には、臍脂色の痣が鮮かに、蝶の型で残っている。

「看護婦さん」

受付の窓口にも男性患者の一人が現れた。同室の患者の軀<sup>いびき</sup>がうるさくて眠れないから、どうにかしてくれと言う。同じ苦情はほかの患者からも出ていた。うるさがれているのは胃アトニーの患者で入室してまだ三日目だった。五十三歳だが、鼻が悪いのか特に息を吸う時の軀が耳ざわりだ。

「困ったわね……本人も承知していて、すまながってるんだから、我慢してあげてよ」

紀子は笑いながら言った。寝言、歯ぎしり、鼾など、病氣とも言えない個々の習性を気にしたら病院生活は送れない。

「ほくだけじゃない、みんな不眠症になりそうだって怒ってるんだ。まさか、本人の居る前で言いつけるわけにもいかないから、こうしてやって来たんじゃない……別の部屋へ変えられない？」

男性患者は帰ろうとしない。動かそうにも部屋のベッドは満床である。坂口真弓が溜息をつき、  
「うるさいのは判るけど、これ、どうしようもないでしょう。貴方がその立場だったらどうします？　つらいわよ、きつと」

「明日にも婦長と相談して、いい解決策をさがしますから、もうしばらく我慢してあげて……。巡回の時、わたし達も気をつけて見ますから、ね」

しぶしぶ出て行く患者を見送って、紀子は時計を確かめる。七時二十分だ。六時間ごとに薬を与えなければならぬ患者がいた。点滴を終る者、注射を待つ患者……。処置表を調べながら、手落ちなくと気を配る。一人はナースセンターに待機しなければならないから、紀子は必要分の薬を用意して廊下へ出た。面会室の前を通り過ぎかけて、中にまだ人影の居るのに気がついた。覗いて見ると、帰ったはずのさっきの女が、ぼつねんとベンチに腰かけていた。

「あら、あなた、まだいらったの！」

「すみません、一度外へ出たんですけど、どうしても帰れなくて……」

「もう面会時間は終ったし、そんな所に居残られては、わたし達が困ります。心配いりません、お帰りになって」



「お願いがあるんですけど」

女は腰を上げながら、思いつめた眼差しを紀子に向けてきた。

「何でしょう？」

「鈴木さんになにかあったら、わたしに知らせてもらえないでしょうか」

「知らせるって？」

女は口ごもってから、ショルダーバッグを開けて小型のノートを取り出した。手早く二、三行書きつけてからそれを破り取り、

「これ、わたしのアパートの電話番号です。勤め先がこちら……。面倒だとは思いますが、お願いします。事情があって、家族の方には逢えないので……。駄目でしょうか？」

紙片を差し出す指先がふるえている。胸を衝かれた。一存で逢わせてやろうかと、ちらっとかすめた思いを急いで打ち消した。思いつめた者は衝動的になにをするか判らない。紀子は、自分が塚本吾郎の遭難を知った時の気持を、胸に浮かべた。

「わかりました。お預りします。でもこれはわたしに限ったことですよ。看護婦はごらんのように、みんな忙しいんです。ほかの人には頼めません。わたしが勤務中なら、きっと連絡してあげますよ」

「よろしくお願い致します」

何度も頭を下げてから、女は足早に廊下を玄関の方へ遠ざかって行った。紀子は改めて渡されたメモに目を移した。書き慣れた字体で電話番号が並び、その脇に小倉麻美、と走り書きがしてあった。紙片を折って白衣の胸ポケットに入れながら、紀子はなんとなく、重いものでも持たされたよ